

阿寒湖温泉修景植栽マニュアル

自然と調和した花と緑のまちづくりを目指して

平成24年3月

環境省北海道地方環境事務所

釧路自然環境事務所

目 次

はじめに	1
1. 阿寒湖の特性と花と緑のまちづくり	2
(1) 魅力あふれる観光地づくりをめざして	2
(2) 花いっぱいプロジェクトについて	3
2. 阿寒湖温泉における修景植栽の考え方	4
(1) 修景植栽の役割	4
1) 修景素材としての植物の特性	
2) 阿寒湖温泉における修景植栽の役割	
(2) 植栽エリア区分と植栽指針	5
3. 阿寒湖温泉に導入する植物の注意点	9
(1) 阿寒国立公園と外来植物	9
1) 阿寒国立公園の自然環境、風景の保全について	
2) 北海道ブルーリスト	
3) 今後さらに広がる可能性のある植物の例	
4) 阿寒国立公園の自然環境や風景を守るために	
(2) 園芸植物導入の基本的考え方と注意事項	12
4. 阿寒湖温泉に導入する植物の考え方	13
(1) 草本類	13
A. 自生種の導入	13
1) 自生種緑化のポイント	
2) 緑化や園芸に使われている自生種	
3) 著名な自生種	
B. 園芸種の導入	16
(2) 樹木類	17
1) 緑化樹のポイント	
2) 著名な自生種	
5. 植栽管理の留意点	20
(1) 樹木管理の留意点	20
(2) 芝生管理の留意点	21
(3) 草花類の管理	22
6. 花と緑のまちづくり——今後の事業推進に向けて	24
【参考1】樹木植栽時の留意点	27
【参考2】用語説明	30

はじめに

環境省釧路自然環境事務所では、平成22年度に「阿寒湖温泉らしい景観づくりガイドライン」を作成し、地域住民が主体的に景観形成に取り組むための方向性を整理しました。このガイドラインの中で、阿寒湖温泉での植栽を推進し景観を演出することが重要な方針の一つとされています。

しかしながら、国立公園内にある阿寒湖温泉での植栽に当たっては、自然公園法に基づく一定の規制もあり、場所によってはどんな植物でも自由に植えられるというものではありません。また阿寒湖の厳しい気候条件を考えると、実際に植栽できる植物にも限りがあるのが現実です。

このような中で、阿寒湖温泉ではどのような考え方で植栽を進めていったらよいかについての明確な指針がありませんでした。そのため、阿寒湖温泉における植栽の基本的な考え方と技術的な指針をマニュアルにまとめたものが本書です。

本書では、このほか阿寒湖での導入植物としてふさわしいものと、逆に外来種など要注意植物を掲載しています。特に、一般の園芸種は外来種であることがほとんどのため、そうした種の取り扱いの注意事項なども記載しました。また、よりよい景観を維持するため、植栽の管理についても記載しました。

本書が、阿寒湖温泉における住宅や店舗、あるいは公共空間の緑化や修景に際しての身近な手引き書、参考書として活用していただければ幸いです。

1. 阿寒湖温泉の特性と花と緑のまちづくり

(1) 魅力あふれる観光地づくりをめざして

【阿寒湖温泉活性化の取り組み】

阿寒国立公園は、風光明媚な景観とともに、北海道の中でも未だ原生の自然が多く残されている貴重な地域として知られています。阿寒湖温泉は、その阿寒国立公園の代表的な湖である阿寒湖畔に立地・発展した観光集落で、国内外から年間およそ60万人の宿泊観光客が訪れています。

近年、観光を取り巻く環境の変化などから、観光客数は年々減少傾向にあり、それに対応するために、阿寒湖温泉では2002年から「阿寒湖温泉活性化プラン2010」、また2011年から「阿寒湖温泉創生計画2020」を策定し、地域の活性化に取り組んできています。

【花いっぱいプロジェクト】

その地域活性化の重要テーマの一つが「花によるまちづくり」です。阿寒湖温泉では、「阿寒湖温泉活性化プラン2010」の策定時から、町をあげて「花いっぱいプロジェクト」を展開してきました。これまでの取り組みとしては、主に商店街におけるコンテナ花壇の設置やハンギングバスケットによる店舗の装飾、モデル花壇の整備・運営、花植え講習会の開催などで、この10年間で住民の花に関する知識や技術の高まりとともに花植えに参加する住民の底辺も確実に広がってきたといえます。



【さらに魅力的な花と緑あふれる温泉観光地へ】

商店街の花による演出は年々技術の向上が見られます。この背景には、10年間、実際に植栽を担ってきた「まりも倶楽部」など地域の活動グループの力が大きかったことがあげられます。また、これらのグループとNPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構などが連携し、継続的な活動を展開する基盤がつけられつつあります。今後は、このような人的・組織的基盤とともにこれまでの活動で得たノウハウを生かして、阿寒湖温泉街の緑化修景に取り組むことが期待されます。

【阿寒の自然を守り、花と緑を育てる住民意識が町を変える】

近年、阿寒国立公園においては外来種の侵入が大きな問題となっています。特に住宅地では、最近、ルピナスのように園芸植物が逃げ出し、繁殖しているケースもみられます。また、原生的な自然のエリアであるボッケ遊歩道沿いにもセイヨウノコギリソウが目立ち始めてきており、早急にその対策を考える必要があります。これらの外来種問題に十分配慮しながら、さらに上述したような町を花や緑で景観を演出、修景する活動に地域が一丸となり取り組むことが必要であり、そうした問題意識を持つ地域の取り組みこそが、阿寒湖温泉を真に国際観光地として評価させる要素になるものと思われれます。

(2) 花いっぱいプロジェクトについて

2003年から始まった「花いっぱいプロジェクト」では、以下の5つの目標を掲げて、阿寒湖温泉らしい美しいまちづくりに取り組んでいます。

【国立公園にふさわしい自然と調和したまちづくり】

阿寒湖温泉は国立公園の中にあり、周囲は森林で、そこには様々な野生生物が生息しています。阿寒湖温泉のまちづくりは、国立公園にふさわしい自然と調和したまちづくりをすべての基本とします。

【ランドデザインにもとづく花づくり】

阿寒湖温泉の花によるデザインは、阿寒湖温泉全体のランドデザインに基づき、自然環境との関連性を十分考慮しながら、住民の理解と協力のもと統一的な考え方、計画のもとで進めていきます。

【植物材料は自生種を基本】

阿寒湖畔の自然環境を考慮して、阿寒湖温泉のまちづくりに使用する樹木や草花は、できるだけ阿寒湖周辺に自生する種を中心に導入を考えます。自然保護の視点から、阿寒湖畔の自然環境に負荷をかけないようにします。

【一定のルールのもとで行う園芸種の利用】

園芸種の導入も否定するものではありません。観光地として来訪者をもてなす花などは限定された範囲内で導入することは可能です。たとえば温泉街の拠点となる公園やホテルの庭、公共施設周り、商店街などにおいては、一定のルールのもとで積極的な導入を考えます。

【花と緑のつながりを大切につくる美しいまち】

点から線、線から面へと自然と調和した花のまちづくりを大きく広げていきます。そうした広がりの中で、地域の資源がつながり、美しいまちが形成され、人の心がつながっていくことをめざします。

2. 阿寒湖温泉における修景植栽の考え方

(1) 修景植栽の役割

1) 修景素材としての植物の特性

修景素材としての植物には、大きく次のような特性があります。

- ①町の景観や環境を整える生きた素材であること
- ②市民も参加できる身近な環境素材であること
- ③場所などに応じて、自由に素材を選ぶことや、変形・配置が容易であること
- ④花いっぱい運動など地域のコミュニティ形成につながる素材であること
- ⑤費用が比較的安く、予算に応じた使い方ができること

このように植物は修景素材としての使い勝手がよく、修景効果も大きいことから、便利な素材として使われています。しかし、生き物としての特性を十分理解しないで使ったり、管理を怠ったりすると、徒長して手が負えなくなったり、枯れてしまったりして、かえって景観を壊してしまうケースも少なくありません。

さらに最近では外来種の問題がクローズアップされており、むやみに植栽することに対する警鐘も鳴らされており、注意が必要です。

2) 阿寒湖温泉における修景植栽の役割

阿寒湖温泉で修景植栽を考える場合、大きく次の4つの役割が期待されていると考えます。

【阿寒湖温泉らしい景観の育成】

国立公園あるいは原生的な森に囲まれた自然豊かな湖というイメージを大切にするための修景植栽です。温泉街に緑を取り込んで無機質で殺風景な構造的壁面を和らげたり、景観を阻害するものを遮蔽したりする一方、景観のシンボルとなる樹木等を計画的に取り込んで、阿寒湖温泉らしい個性的な景観をつくります。

【自然の再生】

特に湖岸部や河川敷地などにおいて本来の自然植生を復元させることで、景観の改善を図るとともに自然環境の復元、生物多様性の確保を実現します。

【緑で癒やされる憩いの空間の提供】

緑には景観をつくる機能のほかに心を癒す機能があります。湖岸園地やボッケの森など気軽に散策、休憩できる緑の空間を広げることで、温泉地全体としての癒しの機能を高めます。

【地域ホスピタリティの表現】

温泉街の街角や店舗の店先などを美しい花や緑で修景することで、訪れる観光客に阿寒湖温泉の人たちの歓迎の気持ち（ホスピタリティ）を伝えます。

（２）植栽エリア区分と植栽指針

阿寒湖温泉において今後修景植栽が必要な場所は、次のように整理することができます。

◎国道沿線（役割：景観育成、ホスピタリティ）

温泉市街地を通過する国道 240 号の沿線地域です。ここは、ゆるやかなカーブのある道路であり、ドライバーのための視線誘導的な植栽が適しています。

したがって、道路沿いに線状に植える花壇や樹木の並木などを組み合わせ、国立公園らしい道路景観とともに地域のホスピタリティを感じる道路景観をつくるのが望まれます。

また、ここは温泉街への入り口であることから、エントランス標識の設置に加え、周辺部を修景し、温泉街への入口としてふさわしい雰囲気醸し出すことが必要です。



◎中央通り商店街（役割：ホスピタリティ）

観光客がもっともたくさん集まり散策する場所です。快適で魅力的な空間をつくることは、観光客の滞在時間の延長にも貢献します。ただし、ここは現在道路幅が狭いため、どうしてもコンテナやハンギングバスケットなどの装置型の植栽にならざるをえませんが、今後の街路整備の状況によっては、街路樹の植え込みも考えていくことが必要です。



◎中央通り商店街(中通り)(役割:ホスピタリティ)

中央通りに面していない中通りにも飲食店があり、観光客が訪ね歩く場所でもあります。この場所においても、可能な限り植栽を行い、修景を図ることが必要です。

方法としては同じくコンテナ植栽が基本になりますが、規模は小さくともそれぞれの家屋や店舗に似



合ったぬくもりの感じられる植栽が望めます。

◎ホテル敷地（役割：景観育成、ホスピタリティ）

大きな敷地面積を持つホテルは、植栽いかんによっては町の景観を大きく左右します。その意味で、ホテル事業者に期待するものはきわめて大きいといえます。

ホテル敷地の植栽方法は、建物のスケールから考え、ランドマークとなるシンボリックな樹木（高木）を建物まわりに配し、緑のボリューム感を出すことが望めます。それとあわせて、四季折々の花や紅葉が楽しめる低木、灌木、草花を組み合わせ植栽し、ホテルの外観を演出します。こうすることで、ホテルのイメージアップとともに街並み景観が大きく改善します。



◎公共施設空間（役割：景観育成、ホスピタリティ）

市役所（支所）や消防署、除雪センター、エコミュージアムなどの公共施設もまた大きな施設であり、その建物や付帯駐車場周りの緑化は、地域の景観を大きく変えることにつながります。

また、一般の観光客が立ち寄る公共施設におけるプランターやハンギングバスケットなどによる花の寄せ植えは、訪れる観光客に阿寒湖温泉のホスピタリティを伝える効果的なツールといえます。



◎公共駐車場（役割：景観育成、ホスピタリティ）

国道沿いに大きな公共駐車場が3つあり、いずれも車が少ないときは大きなアスファルト面が気になります。国立公園の駐車場ということ考えた場合、できるだけ緑に囲まれた駐車場が望ましく、駐車場の境界部分の仕切り植栽とともに、駐車場内においても一定の緑化が望めます。



◎河川敷地（役割：景観育成、自然再生）

ここは北海道や釧路市の管理敷地になりますが、必ずしも日常的に草刈り等が行われているものではありません。そういう状態の中では、ゴミの不法投棄なども行われ、ますます管理しにくい場所になってしまいます。そのため、定期的な草刈り等の日常的な管理が重要です。



◎湖岸園地（役割：景観育成、自然再生）

温泉街に沿った湖岸地域一帯は一部で園地が整備され、今後も計画的な整備が期待されています。ここは自然も一部残され、身近に湖を楽しめる場所でもあり、その意味でこの場所の植栽は重要です。ある程度のボリューム感と阿寒湖畔らしさをどう表現するかが求められています。



◎公園・広場・緑地（役割：景観育成）

公園としては前田公園が温泉街の中心部にあります。また、阿寒神社の境内も公園的な役割があります。このようなコミュニティ空間については、植栽の管理水準を高め、より美しい景観を育成していくことが望まれます。

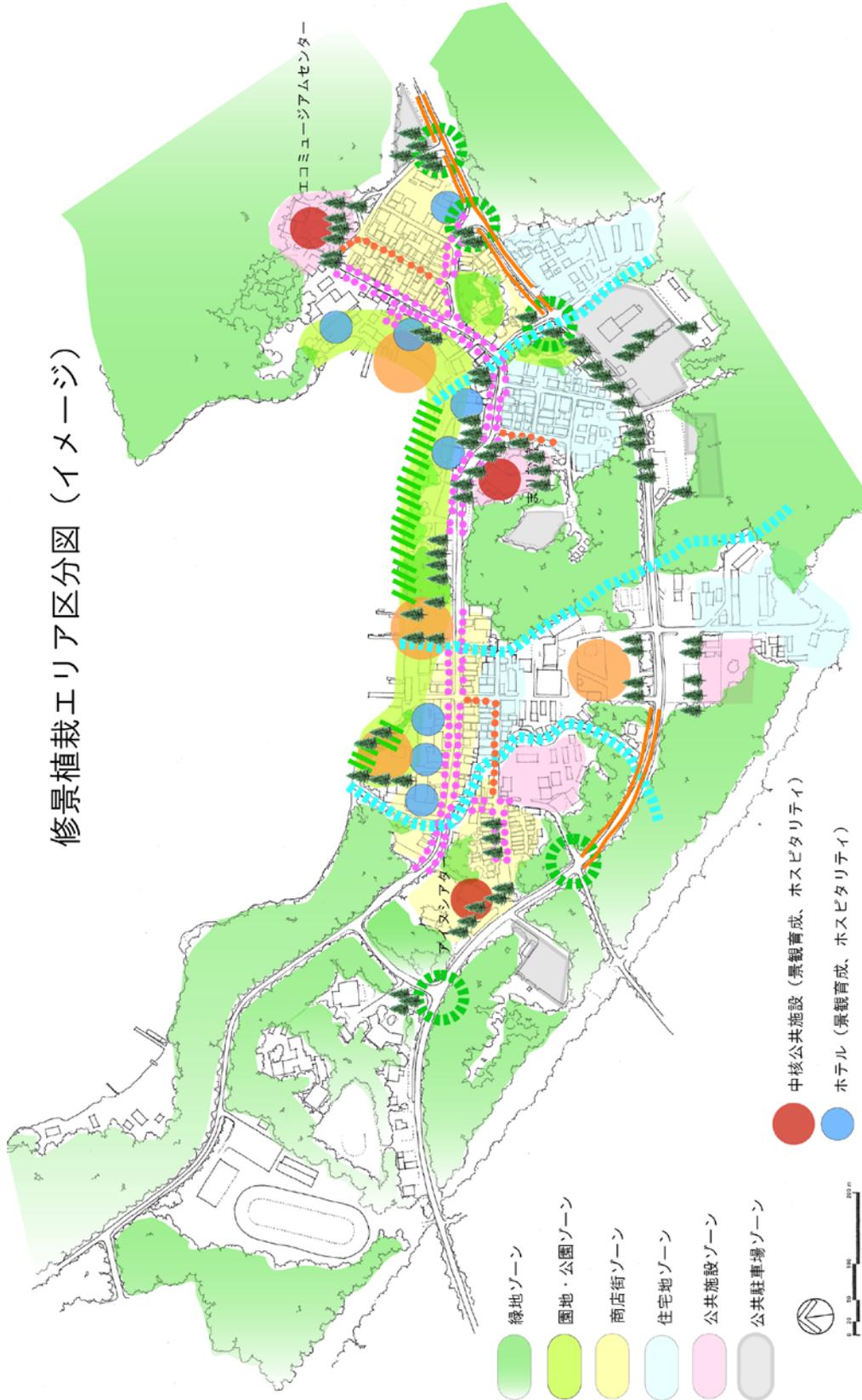


◎住宅地（役割：景観育成）

阿寒湖畔の住宅地にも花と緑を増やしていくことが望まれます。また、住民一人一人が、花や緑に関心を持ってもらうための普及啓発も必要です。



修景植栽エリア区分図 (イメージ)



- 緑地ゾーン
- 園地・公園ゾーン
- 商店街ゾーン
- 住宅地ゾーン
- 公共施設ゾーン
- 公共駐車場ゾーン

- 中核公共施設 (景観育成、ホスピタリティ)
- ホテル (景観育成、ホスピタリティ)

- 重点緑化修景エリア (景観育成、ホスピタリティ、憩いの空間提供)
- エントランス誘導植栽エリア (景観育成、ホスピタリティ)

- ランドマーク植栽エリア (景観育成)
- 道路植栽・花と緑の演出エリア (景観育成、ホスピタリティ)
- 商店街植栽・花と緑の重点演出エリア (ホスピタリティ)
- 商店街植栽・花と緑の演出エリア (ホスピタリティ)
- 湖岸修景エリア (景観育成、自然再生、憩いの空間提供)
- 河川修景エリア (景観育成、自然再生)

3. 阿寒湖温泉に導入する植物の注意点

(1) 阿寒国立公園と外来植物

1) 阿寒国立公園の自然環境、風景の保全について

国立公園は「我が国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地」として、環境大臣により指定されます。阿寒国立公園も日本を代表する風景地として、昭和9年に国立公園に指定されました。その日本を代表する国立公園の自然環境や風景を後世に受け継いでいくための課題の一つが、外来種（外来植物）の脅威です。阿寒湖畔周辺においても、道路や河川、湖畔沿い、温泉街や遊歩道沿いに46種の外来植物の侵入が確認されています。

外来植物の影響は全国各地で報告や指摘がされており、日光国立公園や十和田八幡平国立公園の一部では外来植物の影響により、在来植物の減少が報告されています。同様に、全国各地で外来植物により在来植物の駆逐、在来植物との雑種形成が指摘されています。阿寒国立公園でも、外来植物が増えており、本来の在来植物への影響が懸念されます。また、道路や歩道沿いに外来植物が繁茂し、阿寒湖畔本来の植生や風景が損なわれています。外来植物が増え続ければ、「せっかく阿寒湖畔に来たのに、外来植物ばかり見て、帰る」という事態になってしまうかもしれません。

2) 北海道ブルーリスト

北海道では道内に定着している外来種の実態を把握するため、2004年に「北海道ブルーリスト」を作成し、2010年に改訂を行っています。

北海道ブルーリストは、野生化している生物をできるだけリストアップするとの考えでつくられています。このリストの中には、コスモスやスイセン、チューリップなど私たちにとって身近な植物が多く登場します。また、カテゴリーごとに分類されており、最も影響が心配される種類はカテゴリーAに分類されていますが、次のカテゴリーBにも園芸的にみて広がりやすいとされる種類が入っています（表1参照）。



阿寒湖温泉住宅地に咲く外来植物

きれいな花を咲かせていますが、ルピナスやフランスギク、コウリンタンポポ、アカツメクサ、シロツメクサなどの外来種を確認できます。

3) 今後さらに広がる可能性のある植物の例

ブルーリストに掲載されている植物の中で、今後、ますます拡散が心配される植物がたくさんあります。ここではそのごく一部について紹介します。

【ネバリノギク】(カテゴリーA3、環境省 要注意外来生物)

道央や胆振、日高に広がり、道東の一部にも進出が見られます。種子、地下茎による繁殖力は非常に強く、乾燥した荒地でも生育する強さを持ちます。

【トールフェスク=オニウシノケグサ】

(カテゴリーA3、環境省 要注意外来生物)

もともと牧草用として輸入され、ほぼ道内全域で野生化が確認されています。トールフェスクといえば芝生の名前としても有名ですが、自然度の高い地域では芝生種を選択にも考慮が必要な時代となってきました。最近では種子のできない芝生品種も使われつつあります。

【イワミツバ=アエポゴディウム】(カテゴリーA2)

斑入り品種が庭植えされます。やや湿った土地を好み、半日陰でも生育します。現在のところ、道東地域への拡散は確認されていませんが、森の中へ進出する可能性も捨てきれません。地下茎による繁殖力が特に強く、生長も非常に速い植物です。

【コウリントンボゴ】(カテゴリーA2)

ほぼ全道的に広がり、根絶は難しい状況です。乾燥した荒地にも侵入し、人工的に基盤整備された場所への侵入も目立ちます。種子による繁殖力が強いのが特徴です。

【キショウブ】(カテゴリーA2、環境省 要注意外来生物)

全道的に広がり、湖や川岸で繁殖しています。もともと観賞用に栽培されていたものが逸出したもので、在来種との自然交雑による遺伝子のかく乱が心配されています。

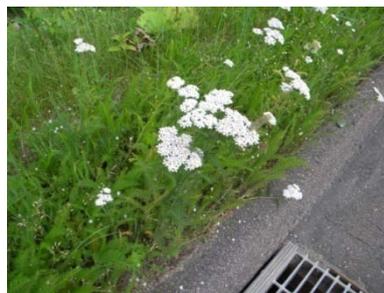
その他、観賞用に導入されたセイヨウノコギリソウ (カテゴリーA3) も阿寒を含む広範囲で野生化しています。



植栽に使われるイワミツバ
イワミツバの斑入り品種が
グラウンドカバープランツとして
人気があります。



阿寒湖畔に咲くキショウブ



国道沿いに開花する セイヨウノコギリソウ

在来種が育たない乾燥したやせ地に
生育する一方、環境への適応力が強く
ボッケの森にも侵入しています。

4) 阿寒国立公園の自然環境や風景を守るために

もし、植えた花の種がこぼれてあちらこちらで生えてきたら、野生化への第一歩を踏み出したと考えられます。一度、広がった外来植物は駆逐や根絶が極めて難しくなります。阿寒湖温泉では、その自然環境や風景を守るため、まずは外来植物を使用しないことが重要です。どうしても外来植物や園芸種を使用する場合には、事前に他の地域で野生化していないか、北海道ブルーリストに掲載されていないか等を確認して、慎重に選ぶことが重要です。また、外来植物や園芸種を使用する場合には、種子をつけさせないように、飛び散らないように管理する必要があります。このようなちょっとした心がけと行動が、阿寒湖畔、阿寒国立公園の貴重な自然環境や風景を守ることにつながります。

表1 ブルーリストのカテゴリー区分

視点 1	視点 2	視点 3	視点 4	カテゴリー区分	
本道に導入(※1)されているか	本道に定着できるか(越冬の可能性など)	本道に定着しているか	本道への影響(※2)は		
○:導入されている △:不明またははっきりしない ×:導入されていない可能性が高い	○:定着できる(またはその恐れがある) ×:定着できない可能性が高い	○:定着している △:不明またははっきりしない ×:定着していない可能性が高い	○:影響等が報告されているあるいは懸念されている △:上記以外		
○	○	○	○	A	
		△	△	B	
		△	○	C	
		△	△	D	
		×	○	E	
	×	△	F		
	×	×	-	G	
△・×	○	○	○	H	うち注意種
		△	△		
		△	○		
		△	△		
		×	○		
	×	△	I		
	×	-	-	J	
(昆虫類のみ)導入されている「室内昆虫」である				K	

北海道ブルーリスト 2010 より

カテゴリー区分 A の細区分

A1	緊急に防除対策が必要な外来種
A2	本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種
A3	本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種

(2) 園芸植物導入の基本的考え方と注意事項

外来生物法によって定められた特定外来生物であるオオキンケイギク、オオハンゴンソウなどは、栽培することが許されていません。また、法的規制はないものの適切な取り扱いが必要とされる要注外来生物として、前述の種類のほかニセアカシアやオランダガラシ（クレソン）などが指定されています。

また、ブルーリストのカテゴリーA1、A2については、生態系の影響を懸念されていることから、その使用は避けた方がよい種類となっており、国立公園区域等では防除対策が必要とされています。

一方、野生化している種類数は多く、研究も十分に進んでいないのが現状です。近年、特に宿根草については海外からの輸入が盛んになっており、野生化に関しては未知の種類が多いと言わざるを得ません。また、北海道を含む日本国内から海外に渡った植物も多く、それらが逆輸入されているケースもあります。

また道内自生種も、道内だけでなく、海外にも自生している場合があります。例えば、エゾミソハギは日本国内だけでなく、世界各地に分布しているのが現状で、海外で採取されたものが栽培され、輸入されている可能性があります。野生化を防ぐためには、外来の植物を扱う私たちが注意していくことが大切です。

園芸植物を植える場合、花壇造成のために客土を行うことがありますが、一般的に他地域の土壌を使うことが多く、そこに含まれた種子から外来植物の侵入、定着が始まることもあります。従って、もともとその土地にある土壌を改良し、使用することを基本とし、できるだけ客土をしなくて済むようにすることも外来植物の侵入防止に役立ちます。

表 2.カテゴリーA に分類される植物（一部抜粋）

A1	なし
A2	イワミツバ、オオハンゴンソウ、フランスギク、ハリエンジュ（ニセアカシア）、キバナコウリン タンポポ、コウリンタンポポ、キショウブなど
A3	ムシトリナデシコ、ドクダミ、ルピナス、セイヨウミヤコグサ、フジ、ジャコウアオイ（マスク マロウ）、ヒレハリソウ（コンフリー）、キツネノテブクロ（ジギタリス）、マルバハギ、セイヨウ ワサビ、ユウゼンギク、シャグマハギなど

4. 阿寒湖温泉に導入する植物の考え方

(1) 草本類

A. 自生種の導入

1) 自生種緑化のポイント

阿寒湖畔自生種を使って修景植栽を行う方法があります。最近では、海外の園芸植物一辺倒に対する見直しの動きもあり、野生植物の人気も高まりつつあります。具体的にはオカトラノオやエゾクガイソウなどが庭に植栽されています。

ただし、同じ種であっても、海外や本州、道内の他地域から持ち込んだ植物も厳密には外来植物と言えるので、園芸植物と同じく慎重な取り扱いが必要です。阿寒湖地域から種子を採取して苗をつくり植栽することができれば、修景だけでなく自然植生の復元にもつながり、最良の植栽方法と言えます。

しかしながら、植物やその種子の採取にあたっては地権者の了解が必要であり、一部の植物は自然公園法により、その採取が規制されています（指定植物）。また、数の少ない、希少な植物の採取は避けなければなりませんし、種子の採取の仕方についても、周辺を踏み荒らさないことや、複数の個体から少しずつ採取し遺伝的な多様性を確保すること等、専門家の指導を仰ぐことが必要です。このような阿寒湖畔での植物の種子の採取、その苗つくりと植栽については、個人ではなく、地域ぐるみで計画を立て、行動していくことが必要です。

2) 緑化や園芸に使われている自生種

表3は阿寒国立公園に自生する植物の中で、緑化や園芸に使われている種類です。

これらの植物を購入して栽培することは可能ですが、園芸種に比べ同種または類似した種が地域に存在しているため、交雑による遺伝子攪乱の危険性をはらんでいます。したがって、上述したように、これらの植物は自生種であっても園芸植物・外来植物であるという認識を持ち、その植物の増殖や自然の中に戻したりする行為は慎まなければなりません。

表3 緑化および園芸材料として利用されている阿寒国立公園自生植物

※は阿寒国立公園特別地域内における指定植物

日当たりの草花 (赤字は半日陰での生育も可)	日陰の草花 (赤字は日当たりでの生育も可)
イブキジャコウソウ※	アキカラマツ
エゾカワラナデシコ※	エゾエンゴサク
エゾカワラマツバ	エゾカラマツ※
エゾカンゾウ※	エゾキケマン※
エゾスカシユリ※	エゾトリカブト※
エゾノコギリソウ※	エゾノタチツボスミレ
エゾミソガワソウ	エゾヤマオダマキ (オオヤマオダマキ)
エゾミソハギ	オオアマドコロ
エゾリンドウ※	オオバナノエンレイソウ※
エゾルリソウ※	オシダ
オトコエシ	ギョウジャニンニク
オミナエシ	クジャクシダ
キジカクシ	クリンソウ※
キタカワミドリ	クルマバツクバネソウ
キバナノアマナ※	クルマユリ※
クサレダマ	クロユリ※
クロバナハンショウヅル※	コウライテンナンショウ (エゾテンナンショウ)
サワギキョウ※	ゴゼンタチバナ※
ススキ	サラシナショウマ
センダイハギ※	スズラン
タカネナデシコ※	ツクバネソウ
タチギボウシ※	ツバメオモト※
チシマフウロ※	トウゲブキ (エゾタカラコウ) ※
ツリガネニンジン	ニリンソウ
ノコギリソウ	ヒトリシズカ
ヒオウギアヤメ※	ヒロハテンナンショウ
ヒメイズイ	フクジュソウ※
ヒヨドリバナ	フタリシズカ
ミヤマハンショウヅル※	フッキソウ
ミヤマラッキョウ	ベニバナヤマシャクヤク
ヤナギラン	ホウチャクソウ
ヨツバヒヨドリ	マイヅルソウ
ワレモコウ	ミヤマエンレイソウ※
	ヤマブキショウマ

『阿寒国立公園の自然 (前田一步園財団)』より抜粋

2) 著名な自生種

ここでは、自生種の中でも一般に多く植栽される種類を紹介します。



【クリンソウ】

サクラソウ科 開花期：初夏 草丈：40～80cm

湿り気のある明るい林内に自生しており、保水性のある土地に植栽されています。性質は強く、比較的気軽に使用できる材料です。日本から海外にも渡っており、水辺の植栽材料として使われています。



【エゾミソハギ】

ミソハギ科 開花期：夏 草丈：50～150cm

湿原の植物として知られていますが、性質は極めて強くある程度乾燥した場所でもたくましく開花し続けます。寿命も長く、植え替えしなくても長年開花し続けます。



【ヤマシャクヤク】

キンポウゲ科 開花期：初夏 草丈：40～50cm

林内に自生しています。身近で見る園芸種のシャクヤクのような華やかさはありませんが、清楚な草花として木陰となる場所に植栽されます。腐植質の十分なふかふかした土壌を好みます。



【マイヅルソウ】

ユリ科 開花期：初夏 草丈：10～25cm

林内に自生しています。湿り気のある土壌を好み、条件が良ければ旺盛に広がっていきますので、半陰地のグラウンドカバーとして用いられています。

B. 園芸種の導入

阿寒湖温泉では冒頭で記述したとおり、町をあげて「花いっぱいプロジェクト」を展開し、商店街におけるコンテナ花壇の設置やハンキングバスケットによる店舗の装飾を継続しています。これらの取り組みは、商店街を花や緑で演出し、ホスピタリティを高める効果が期待されています。

園芸種の導入の注意点としては、「3.阿寒湖温泉に導入する植物の注意点」で述べたように、まずは野生化しない品種を選ぶ必要があります。使用する場合には種子をつけさせない、飛び散らないように管理する必要があります。特に、湖岸や河川、森林といった自然に接する場所では注意が必要です。具体的には、広く野生化の知られているルピナスやフランスギクなど、表2に記載されている種やその品種が当てはまります。その他、表4に野生化しやすい植物の一般的傾向を例示しており、これらの特徴を持つ園芸種は要注意です。また、特定外来生物に指定されているオオハンゴンソウ、その園芸品種であるヤエザキオオハンゴンソウなどは法律により栽培等が禁止されています。

商店街やホテル、住宅、道路、駐車場、公共施設周辺等を花や緑で演出し、ホスピタリティを高めるためには、上記のような注意や規制、管理を行いながら、取り組みを進めていくことが求められています。また、建物や施設、看板等との色彩および質感のバランスを考慮し、商店街等ではオリジナリティを出すことを意識するのはもちろん、植栽の維持管理コストや必要な労力についても配慮された全体的な計画を立てて実施することが重要と考えられます。



オオハンゴンソウ
(北アメリカ原産)



ヤエザキオオハンゴンソウ
(北アメリカ原産 園芸種)

表4 広がりやすい植物の一般的傾向

- ・乾燥や温度に対する抵抗性が非常に強く、やせ地での繁殖力も強い
- ・土壌適応性が非常に広く、やせ地以外の厳しい土壌環境でも生存できる
- ・地下茎による繁殖力が強く、地下茎が土中に残存すれば、例えそれが短くても再生する
- ・地下茎及び種子による繁殖力が強く、耐陰性も強いために森林内への侵入も可能である
- ・種子生産量が多く、その発芽能力も非常に高い

(2) 樹木類

1) 緑化樹のポイント

北海道内で緑化樹はおよそ 300 種を超えるといわれています。大きく分類すると常緑樹と落葉樹、さらに針葉樹と広葉樹に分けられます。北海道を代表する常緑針葉樹は、トドマツ、アカエゾマツなど、落葉広葉樹はイタヤカエデ、シナノキ、ハルニレなどであり、阿寒湖畔周辺でも主要な構成樹種となっています。

樹木についても、導入の注意点は草本と同じで自生種による緑化が基本です。また、樹種を選ぶ際には、常緑樹と落葉樹、針葉樹と広葉樹の基本的性状を知り、求められる緑の機能に対応するためには、樹種の基本構成を定めることが大切です。

阿寒湖畔周辺に生育していない樹木を使用する場合、耐寒性や耐風性も考慮する必要があります。同じ道内で緑化樹として使用されているケヤキやモクレンなどは、寒さの厳しい阿寒湖温泉では生育しない可能性があります。

このことから自生種を利用した緑化が最適です。一方、外来の樹木でも耐寒性の非常に強い樹種としては、ヨーロッパトウヒ、カナダトウヒ、プンゲンストウヒが知られています。

その他、樹木の管理や見せ方も重要であり、円錐の樹形を見せる種類では、高さを調整するための芯止めはもちろん、邪魔な枝を落とす下枝切りも行いません。植えるスペースに合わせた樹高や幅となる種類を選ぶ必要があります。

表 5 道内の主な緑化樹（木本）

			自生種	移入種・外来種
常 緑	針葉樹	高木種	トドマツ、アカエゾマツ、イチイ、キタゴヨウ、アカマツ(道南)など	クロマツ、スギ、ヒノキ、ヨーロッパトウヒ、プンゲンストウヒ、カナダトウヒ、ニオイヒバ、コンコロールモミなど
		中・低木種	ミヤマビャクシン※、リシリビャクシンなど	モンタナマツ
	広葉樹	高木種	—	—
		中・低木種	イソツツジ※、サカイツツジ、エゾユズリハ、ツルマサキ、フッキソウ、ハクサンシャクナゲ※、キツタ(道南)など	サツキ、コトネアスターなど
落 葉	針葉樹	高木種	—	カラマツ、グイマツ、メタセコイア
		中・低木種	—	—
	広葉樹	高木種	イタヤカエデ、シナノキ、ナナカマド、ハルニレ、エゾヤマザクラ、ヤマモミジ、カツラ、イヌエンジュ、キタコブシ、など	ケヤキ、シンジュ、ユリノキ、モクレン、プラタナス、セイヨウミザクラ(サクラランボ)、ウメ、ソメイヨシノ、サトウカエデ、セイヨウトチノキなど
		中・低木種	ノリウツギ、ツリバナ、マユミ、エゾヤマツツジ、ハマナス、エゾアジサイ、エゾスグリ、エゾシモツケ※、ヤマブキ(道南)、エゾコリンゴ、ウコンウツギ※など	ライラック、コデマリ、ユキヤナギ、メギ、フサスグリ、キンロバイ、ムクゲ、サングミズキ、レンゲツツジ、ヨドガワツツジ、ドウダンツツジ、レンギョウ等

・太字は阿寒での生育可能な樹種

・常緑樹針葉樹と落葉広葉樹には特性の違いがあり、さらには樹種によるこうした特性を適切に利用すると個性的な道路緑化が可能になります。一方、その方法を誤ると地域景観の破壊をもたらすほか、生育環境が合わずに良好な生育はおろか活着しないで枯死する場合があります。

・※は阿寒国立公園特別地域内における指定植物

2) 著名な自生種

ここでは庭木として一般に多く植栽される自生樹種を紹介します。



【ノリウツギ】

ユキノシタ科 開花期：夏 樹高：2～5m

サビタの名でも知られるアジサイの仲間です。日当たり良い場所から明るい半日陰の場所まで植栽されています。国内では「ミナヅキ」の品種が有名で海外でも園芸品種がつくられています。剪定しやすく丈の調整も比較的容易な種類になります。



【エゾノコリンゴ】

バラ科 開花期：春 樹高：5～10m

名前の通りリンゴの仲間です。観賞用として植えられています。食用リンゴと比べて寒さには非常に強く、各地で植栽されていますが、時にケムシが発生してしまうところが難点です。観賞用リンゴといえば「クラブアップル」が有名ですが、これはアメリカやヨーロッパで改良された品種群の総称です。



【ウコンウツギ】

スイカズラ科 開花期：初夏～夏 樹高：30～150cm

高山帯に自生する種類で、一般に庭植えされるタニウツギ、ベニウツギなどの仲間です。やや性質はデリケートで直射日光が一日中当たらない明るい半日陰などへ植栽されます。水はけ、保水性にも気を配った土壌へ植え、やさしく管理することが望まれます。

【イタヤカエデ】



【アカエゾマツ】



【アズキナシ】



【常緑針葉樹と落葉広葉樹】

落葉広葉樹は、葉の色が明るく軽快な印象を与えるほか、春の芽吹き、初夏の新緑、秋の紅(黄)葉、冬の裸木というように季節に応じて豊かな表情をもっています。しかし、その反面冬季の緑量が確保できないという欠点があります。

常緑樹針葉樹は、季節毎の表情の変化にも乏しいですが、冬期間の緑量が確保できるという長所を持っています。植栽の機能的側面から比較すると、夏の緑陰提供、冬は陽ざしの確保することができるのは、落葉樹が季節感も豊かで望ましいといえます。

一方、常緑針葉樹は四季を通じて豊かな緑量を確保できることから環境施設帯等で特に遮蔽、遮音機能が要求されるような場所等では広葉樹より優位です。

また、針葉樹のうちクロマツやアカマツ、キタゴヨウ、ニオイヒバ等を除く、トドマツ、アカエゾマツ、ヨーロッパトウヒなどは、端正な円錐形の樹形を有しているため、人工的な景観に調和しやすく規則型の植栽に適しています。

しかし、コンクリート構造物等の周囲で自然景観調和を図るような場合には、個性的な樹形のシルエットによって背景となる構造物の存在が逆に強調されるため、樹形が不定形な広葉樹を使用するほうがよいとされています。

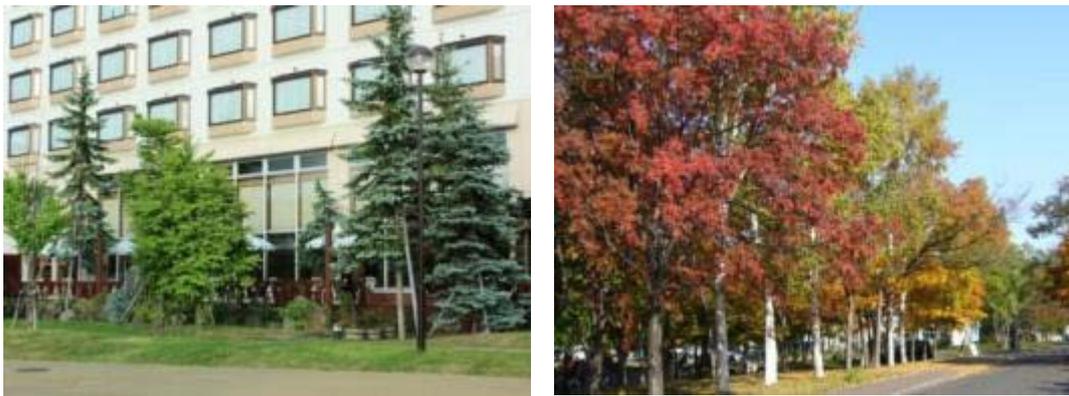


写真 常緑針葉樹（写真左：プンゲンストウヒ）と落葉広葉樹（写真右：ナナカマドなど）

②阿寒での常緑樹の取り扱い

積雪寒冷地の道内で樹木を植栽する場合は、冬期間のことも十分考慮する必要があります。常緑針葉樹は日陰ができ、冬はその部分がアイスバーンになることから通行車両や歩行者の安全上問題となります。また、クロマツ、アカマツ等のマツ類は、雪が乗りやすい樹形のため落雪、落枝の危険があります。さらに、クリスマスツリー型の樹形になるアカエゾマツ、トドマツ等のトウヒモミ類は、剪定による樹形の維持が難しく、先端の芽（頂芽）を切ると樹形が崩れてしまうことから、電線と空間を共有する街路樹には不向きです。

このため、常緑樹については、街路樹としては原則用いず路面に影響の及ばない広場などに限定するのが望ましいでしょう。

5. 植栽管理の留意点

(1) 樹木管理の注意点

●将来の大きさを予想する

樹木は草花のように「思ったように育たない」「予想より大きくなった」などの理由で取り換えたと思って簡単ではありません。最近では樹木が大きく育ち過ぎて扱いきれなくなったため、自宅の樹木の伐採を依頼する人が増えています。剪定によって大きくなりすぎないように維持することも可能ですが、20年後も同じ作業を毎年毎年できるかを最初に考えておくことが大切です。

一方、外来種では多くの低木種が導入されており、あまり高くないわい性の園芸品種も針葉樹を中心に植栽されています。

さらに、どのくらいの数を植えるかも大切です。樹種によっては横幅（樹幅）も大きくなります。たとえ敷地の広い場所であっても、たくさん植えずぎると混みすぎてそれぞれの樹木が健全に育たないばかりか、一帯が薄暗くなります。写真のように1つの木を本来の姿で見せるのも魅力的で、たくさん植えればよいとは限りません。



●作業手間の目安をつけておく

簡単にやり直しの効かない樹木は将来の樹高や樹幅を知るとともに、病虫害特にケムシ類や植栽場所によって変わる剪定など作業手間の目安を知った上で植えることが大切です。これらは簡単に判断できるものではありませんので、特に大きくなる木（高木）を植える場合は、専門家への相談が必要となる場合も多くあります。

一方で樹高の低い木（低木）は、作業手間の観点から比較的気軽に植えることができます。自生種の中ではイソツツジ、ウコンウツギ、エゾマルバシモツケ、エゾムラサキツツジ、エゾヤマハギ、オオタカネイバラ、クロミノウグイスカズラ、チシマザクラ、ツリバナ、ノリウツギ、ハクサンシャクナゲ、ホザキシモツケ、ホザキナナカマド、マユミ、マルバシモツケ、ミヤマビャクシンなどが低木に分類されます。

●種類ごとに剪定時期を知っておく

樹木の剪定は種類によって時期が異なるので一概には言えませんが、大まかな傾向としては春咲きの花木は花後すぐと冬期間に行うのが一般的です。常緑樹は主に初夏から夏にかけて枝の整理を行います。しかし、剪定には一定の技術が必要であり、特に高木類については外部に依頼せざるを得ないこともあります。一方、低木類には剪定しやすい樹種も多いので、自ら行うことも可能です。

●樹木への施肥は根元から離して行う

樹木の施肥は草花ほど頻繁に行うものではありません。生長が芳しくなく、花付きが悪い場合は行うこともありますが、その原因は排水不良等によるもので、施肥によって解決しない場合が多くあります。土壌条件も良いのに生長が芳しくない場合は、油かすなどの有機質肥料を与えます。樹木は横方向へも大きく根が張ることが多いので、根元から十分離れた位置に与えます。

(2) 芝生管理の注意点

牧草を由来とする外来種も多く、その中の一つであるトールフェスクも環境省の要注意外来生物に指定され、問題となっています。トールフェスクは芝の品種としても有名で大量に使われていますので、国立公園や周辺地域では注意が必要です。

管理さえしていれば種子ができることはありませんが、万が一放置された状況となると一気に野生化する可能性も否定できません。

最近では種子のできない品種も発売されているので、そのような品種を使用することも検討する価値があります。

芝ロールのようにマット状にしたハーブ苗で敷くだけで簡単に使えると謳われる、いわゆる「ハーブマット」を芝生の代わりに使用する例もみられます。当然ハーブも外来種が多く野生化の心配があるので市販品の使用は考慮が必要ですが、人の踏み入れない場所では、芝生の代わりに阿寒国立公園に自生するタイムの一種であり、性質が強いことも知られる「イブキジャコウソウ」をグラウンドカバーとして使うという選択肢も考えられます。

芝生を美しく保つためには、概ね週1回程度の芝刈りと月1~2回の施肥を続けることが大切です。また、砂や土壌を芝地に追加する目土入れ、さらに人の立ち入る場所では、どうしても土が硬くなっていきますので、通気性を高めるエアレーションやコアリングといった芝地独特の管理を定期的に行うこととなります。

芝地は公共施設等においても十分な管理が行われていないのが現状です。それは人件費を含めて草花管理よりも大きなコストがかかるからです。芝地造成にあたっては維持管理に必要な手間やコストを考慮してから実施にあたるのが大切です。



(3) 草花類の管理

花壇には基本的に灌水は行いません。灌水が一定頻度必要な場合は、保水性を高める土壌改良を行きましょう。ただし、苗を植え込んだ直後は、根が十分に張るまでの1カ月程度、過乾燥にならないように注意が必要です。

土壌の栄養状態が良ければ特に必要ありませんが、一年草の場合は積極的に施肥すると良いでしょう。その際は、花を咲かせるリン肥料も与えるようにします。

人に見せる場所では、花がら摘みをまめに行って、常に美しく保つ必要があります。また、それが野生化を防ぐ重要な手段でもあります。花がら摘みが大変な場合は、カラーリーフなど葉の美しい植物を多用する植栽手法も考えられます。

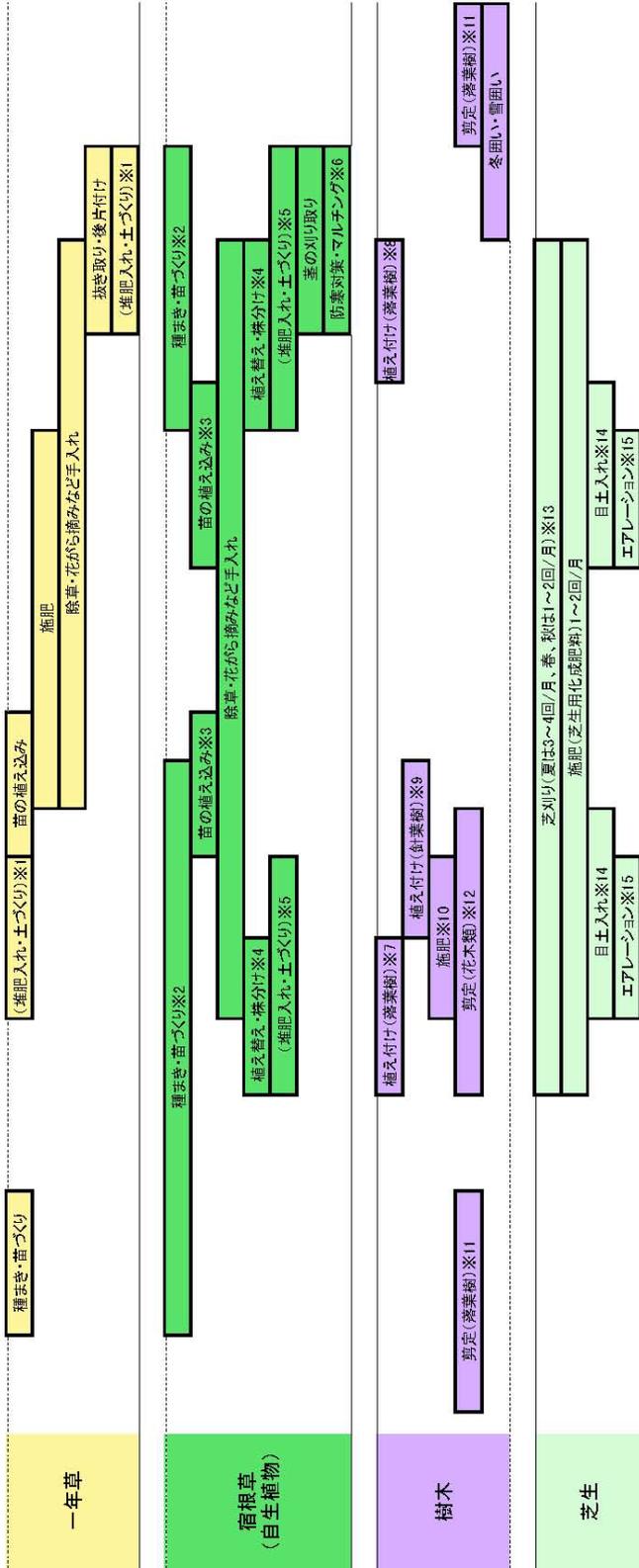
摘んだ花がらは周辺に放置せず、密閉度の高いビニル袋に入れて確実に廃棄します。

なお、園芸種を適切に使用・管理しているかを判断するための一つの目安としてフローチャートを作成しました。

病虫害対策については、公共的なスペースでは、農薬を使わない管理を心がけます。病虫害が多発する植物は、その場所の環境に合っていない可能性が高く、他の植物への変更を検討することが大切です。

植物の栽培管理カレンダー

11~2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬



- ※1 一年草の植え床作りは植え込み前の春か抜き取り後の秋となりますが、秋に行って土壌を熟成させることが望ましいです
- ※2 宿根草は一年草と異なり、時間をかけてゆっくり育てることができるので、戸外での種まきが可能です。従って、種まき・苗づくりの可能な期間は長くなります
- ※3 夏の乾燥等や冬の凍害による枯死のリスクを避けることができれば植え込みすることができます
- ※4 春に植え替える場合は葉が展開する前に、秋に行う場合は寒さが厳しくなる前に行います。各々の時期にメリットとデメリットがあります
- ※5 苗の植え込みや植え替えの時期に応じて決定します。新しく造成する場合は、一年草と同じ秋のうちに土づくりをすよいでしよ
- ※6 寒さの厳しい阿寒では防寒対策が有効ですが、秋に植え替えた時は必ず行うことをおすすぬします
- ※7 樹木の植え付けは、特に根巻き苗の場合、葉が開く前に植えることと監視も安全です。草花以上に根が張るまで時間を要するので、水やりを定期的に行います
- ※8 秋の植え付けも可能ですが、春に比べてリスクが高いです。特に暖かい地方で生産された苗木の場合、積極的にして冬を越させた後の春の植え付けが安全です
- ※9 針葉樹の場合、植え付け直後の寒風害も心配されるので、少し暖かくなってから植え付けます。なお、少なくとも初年度は冬囲いを行った方がよいでしょう
- ※10 樹木への施肥は必ずしも必要とは限りませんが、樹勢を見ながら必要に応じて有機質肥料を中心に与えます。ただ、果樹や花木では与える機会が多いです
- ※11 落葉樹の冬季剪定は、樹木の骨格を成す枝を整える剪定となります。この時期に枝ぶりをはっきりと目視できることも理由の一つです
- ※12 花後剪定で樹形を整える剪定でもありますが、冬季剪定と比べて比較的軽めの剪定となります。樹種により時期はまちまちで、概ね開花後1ヵ月以内に行うことが基本となります
- ※13 芝刈りは気温の上昇とともに回数が増えます。なお、施肥についても同様です
- ※14 目土入れは春か秋に1回でも行うと芝の生長がよくなります。芝地の凹凸を修正する目的も兼ねています
- ※15 芝地はどうしても踏み固められ、通気性が悪くなると芝の生長に影響します。そこで、芝地に穴をあけて通気性を改善するエアレーションを行うことが健全な芝地づくりに役立ちます

6. 花と緑のまちづくり—— 今後の事業推進に向けて

阿寒湖温泉周辺には、エゾシカやヒグマなどの野生動物が棲む雄大な針広混交林が広がっています。また、阿寒湖温泉からは、阿寒湖や雄阿寒岳などを望むことができ、その湖水と山岳景観は、日本を代表する風景地と言えます。その森の中には、季節を彩る草花が咲き誇ります。ポツケの森では、雪解け後にはフクジュソウやミズバショウ、エゾエンゴサク、ヒメイチゲ、ニリンソウ、エゾオオサクラソウ、6月に入るとエゾノレイジンソウやバイケイソウ、ツマトリソウ、夏にはキツリフネやオオウバユリ、エゾトリカブト、ジンヨウイチヤクソウなど、数多くの色とりどりの自生植物の花を楽しむことができます。

●阿寒湖の季節を彩る草花たち



フクジュソウ（4月）



ミズバショウ（5月）



エゾエンゴサク（5月）



ニリンソウ（5月）



エゾオオサクラソウ（5月）



ツマトリソウ（6月）



ジンヨウイチヤクソウ（7月）



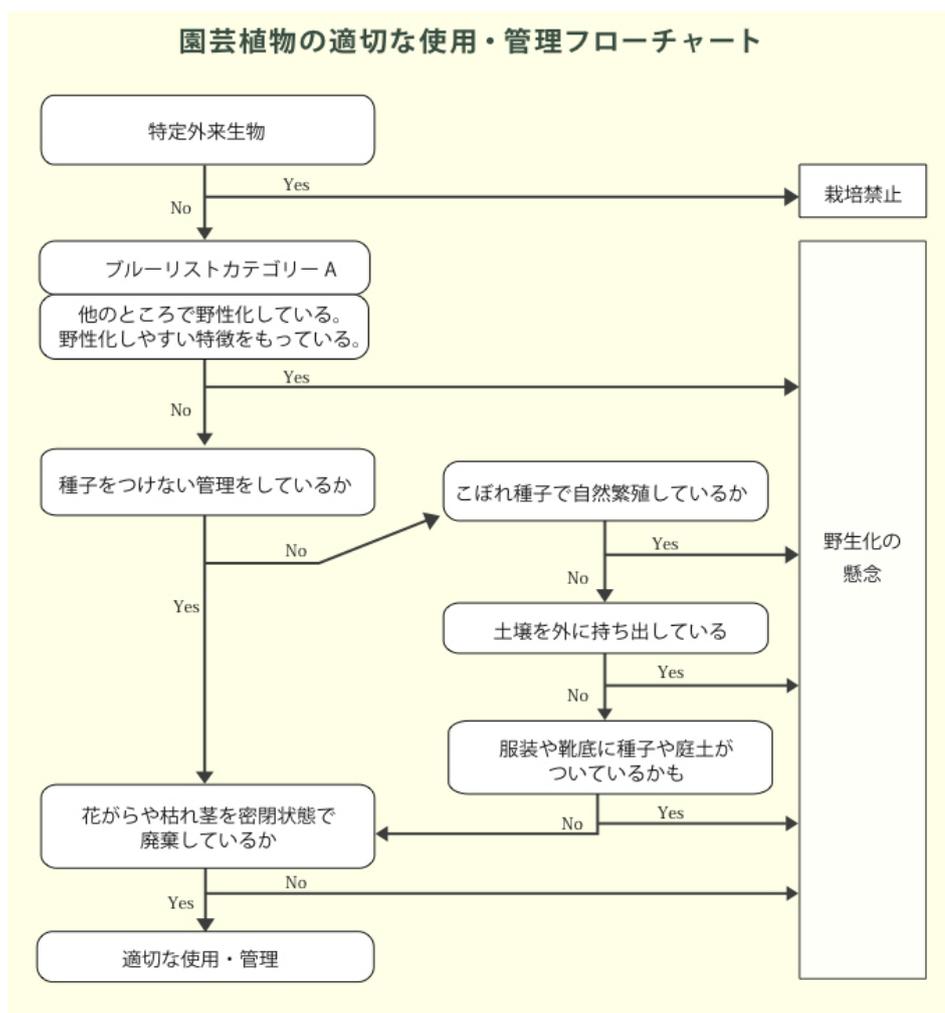
キツリフネ（8月）

このような日本を代表する風景地、大自然を有する阿寒湖温泉において、魅力ある温泉街を目指すためには、周囲の自然環境要素をできるだけ地域に取り込み、周辺の大自然と調和させる取

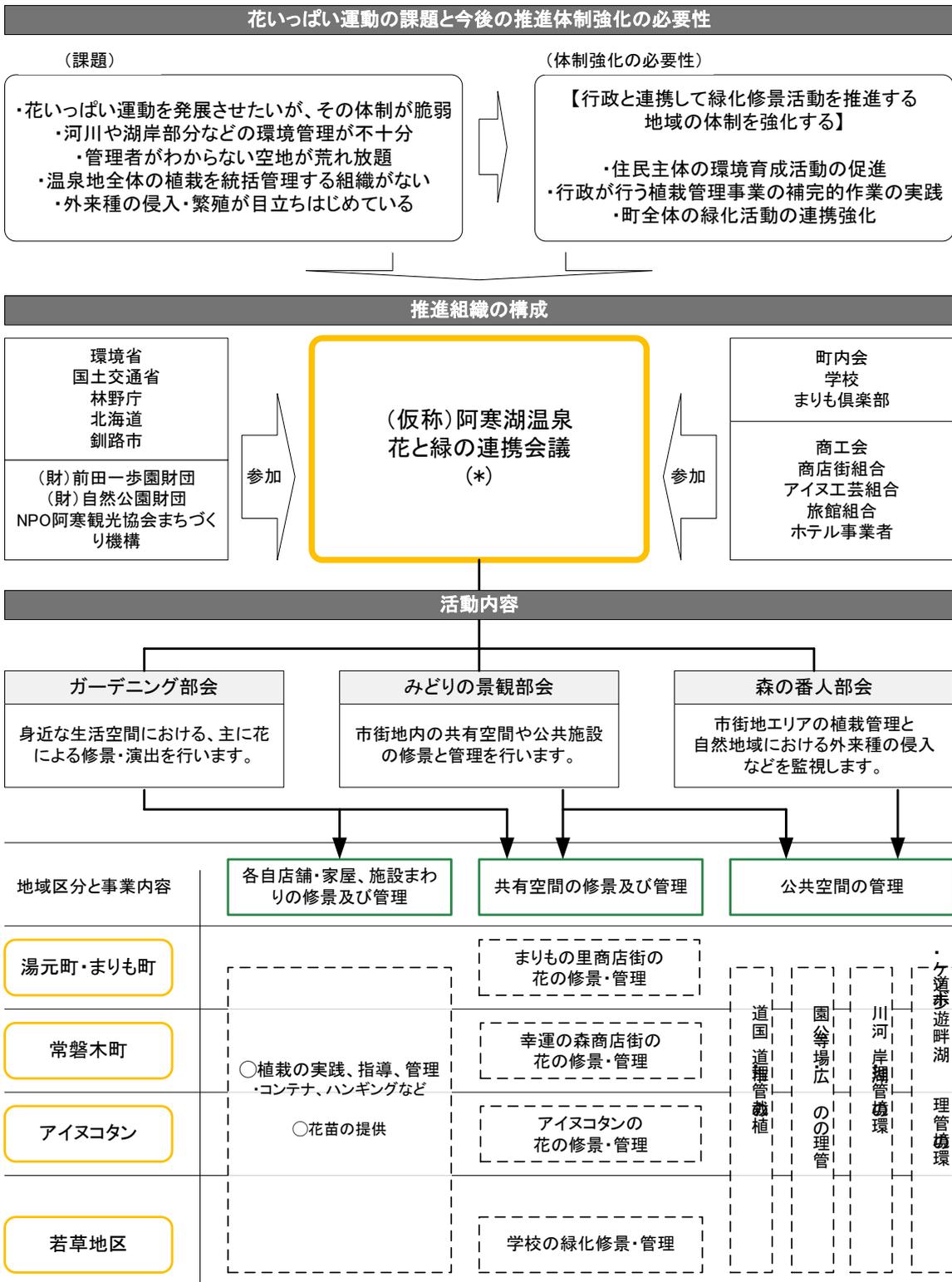
り組みを行っていくことが大切です。その一つが、阿寒湖温泉を周辺の自然環境と調和させるとともに、その景観を演出する修景植栽の取り組みです。

本書や花いっぱいプロジェクトでも言われているように、修景植栽の基本は自生種による植栽です。一方で、阿寒湖温泉のホスピタリティを高めるため、商店街やホテル、住宅、道路、駐車場、公共施設周辺等について、自生種以外の花や緑を使用し、街並み景観を演出することも求められています。ただし、このような花植えや緑化活動に当たっては、阿寒湖温泉周辺の自然環境や景観の保全に十分に配慮する必要があります。日本を代表する風景地、阿寒湖温泉の特性を理解し、その上で地域全体が共通のルールのもとで一致協力して修景植栽に取り組んで行くことが重要です。

また、阿寒湖温泉が花と緑であふれる美しい町になっていくためには、既に阿寒湖温泉やその周辺に広がってしまっている外来植物の駆除や空地の除草、植栽木や草木の適正な管理など、幅広い観点からの取り組みが必要です。そのためにも、行政機関、関係団体、事業者、住民が一致協力して緑化活動を推進する体制を築くことが必要です。そうした取り組みにより、阿寒湖温泉が国立公園にふさわしい花と緑の温泉街として、その魅力が一層高まることが期待されます。



(参考)関係機関・団体の連携による阿寒湖の緑化活動の推進イメージ



(*) 新たな組織を設立するのではなく、例えば釧路市が別途設置している「阿寒湖温泉地区景観協議会」の部会として位置づけることが望ましい。

【参考1】 樹木植栽時の留意点

1) 植え穴

植え穴は樹木（根）の大きさに応じ、深植えにならないように、中央部をやや盛り上げるように床土（間土）を行います。

樹木を植えるときには、根鉢の上が土に隠れる程度に床土（とこど間土）の高さを調整します。

深植えした場合、根の活動を阻害して不定根（二次根）が発生するなど樹木は衰弱します。特に支柱を取り付けない苗木を植える場合は、苗を安定させようとして深植えになるケースが多いので注意します。

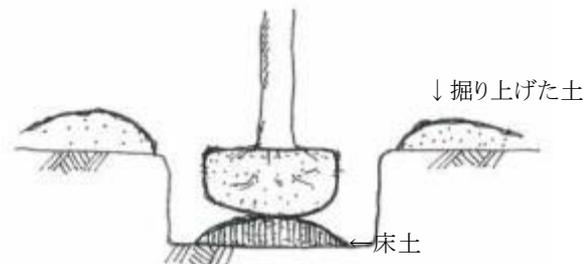


図1 植え穴掘削と床土（間

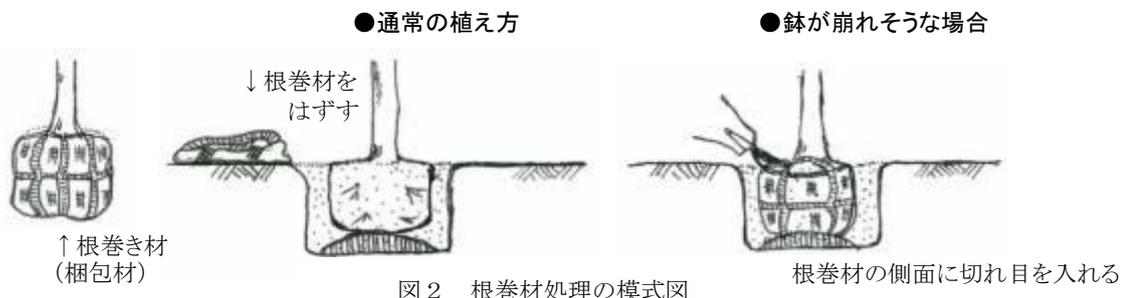
2) 樹木の立て込み

樹木は、搬入した時の根鉢の上面が周囲の土の高さと同じくらいになるように立込み、鉢の根巻材（梱包材）は取り除きます。また、視点方向を考慮して適切な向きになるように配置します。

a. 根巻材（梱包材）の取り扱い

根巻材はコモ・ワラや植物繊維・紙等の有機物からつくられ、暖かい地方では比較的腐植しやすく植付け後の成長に影響はないとされるため、施工性を優先し根巻材をはずさずに植栽している場合が多くみられます。

しかし、寒冷地での分解速度と根系伸長に及ぼす影響については正確な情報はないため、阿寒のように寒い地方では根巻材をはずして立て込んだ方が良いでしょう。もし、根巻材を取って鉢が崩れやすいような場合には、立込み後に、根系が伸長しやすいよう根巻材の側面に切れ目を入れ根がでやすい状態で植えましょう。



b. 植える向き

樹木は苗畑の陽あたりにより、裏表（うらおもて）ができます。日光がもっとも多く受けていた面を樹表（きおもて）、その反対側を樹裏（きうら）といいます。立込みは、主な見る方向に

樹表を向けます。

3) 植え付け

立込み後は適切な方法で植穴に埋戻しを行い、植栽した樹木が乾燥で衰弱しないよう十分注意します。また、樹木の根元には水鉢をつくり、雨水を溜めて乾燥防止をしましょう。

a. 埋戻しと土の充填

植付け時の埋戻しを行う方法には、「水ぎめ」と「土ぎめ」という方法があります。

● 水ぎめ

水ぎめは、植穴に土を埋め戻すときに水を入れながら細い棒などでつついて土塊を小さくし、植穴の中の空隙を少なくして植栽後の乾燥を防ぐために行うものです。

晩秋に植栽するときには、水極めを行うと土壤凍結を招きやすいので、土極めにします。

● 土ぎめ

土ぎめは、水を使用しないで細い棒などで突きながら土を充填する方法です。

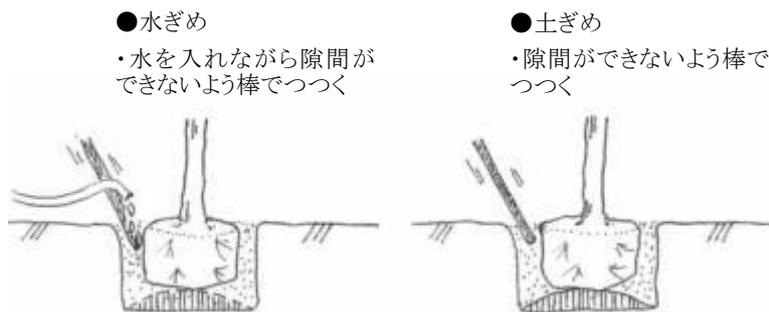


図3 水ぎめと土ぎめのイメージ図

b. 鉢

水鉢は、根元を中心としてドーナツ状に低く土を盛り、灌水した水や雨水を溜めるようにします。ただし、粘土質系で水はけが悪いなど過湿な場所では不要です。

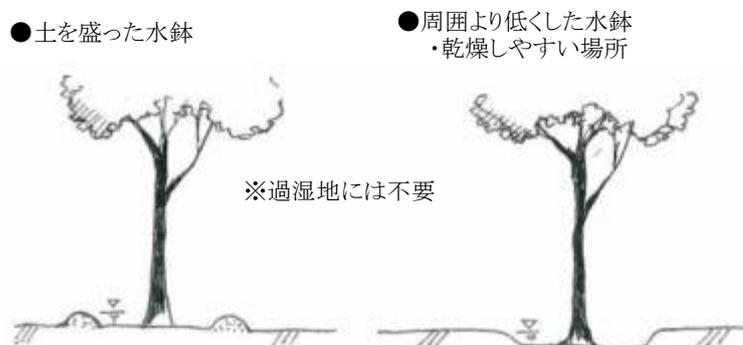


図4 水鉢の模式図

4) 蒸散防止のための剪定

植栽木は根を切り、掘り取った後に植えられるため、根の水分吸収と葉の水分蒸散のバランス

が崩れしおれやすく、そのままにしておくと衰弱するので剪定によって枝葉を少なくして蒸散活動を抑制します。

この剪定は、樹姿を整えるばかりでなく活着促進を図ることを大きな目的としており、無くなった根に見合った適切な枝葉の量になるよう、枝透かし、切り返し剪定により懐枝やからみ枝等の不要枝を切除するものです。ただし、植栽した樹木が本来持っている樹形まで崩してしまうことがないように注意します。

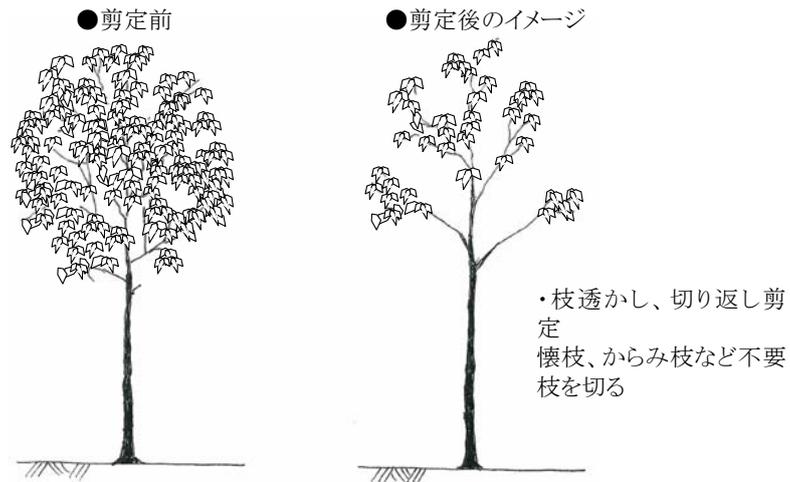


図5 蒸散防止のための剪定模式図

【参考2】用語説明

外来生物法

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律。2005年施行。特定外来生物による生態系、人の生命・身体、農林水産業への被害を防止し、生物の多様性の確保、人の生命・身体の保護、農林水産業の健全な発展に寄与することを通じて、国民生活の安定向上に資する目的で制定された。外来の生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から特定外来生物が指定され、飼育や栽培、輸入、野外へ植えること等が規制される。

修景

自然の美しさを失わないように街並みなどを整備すること。ランドスケープとも言う。

自生種・外来種

古くから地域に自生している植物を自生種（在来種ともいう）、他地域から人為的に持ち込まれたものを外来種（移入種、帰化植物との呼び名もある）という。「外来種」の言葉から海外から導入したものについて呼ばれているようにも思えるが、国内の他地域から持ち込まれたものも外来種であり、それぞれ「国外外来種」「国内外来種」と呼ぶ。

園芸種

花が美しい、開花期間が長い、耐病性があるなど特定の目的のために人為的に改良された選抜種や園芸品種をいう。海外に原産する外来種が非常に多い。

生物多様性

すべての生物の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性および生態系の多様性を含んでいる。簡潔には、生物がバラエティに富んでおり生態系が複雑で多様である状態をいう。

ホスピタリティ

相手を思いやり心からもてなすこと。サービス業界にて頻繁に使われる。

地下茎

地中にある茎で一目根のように感じるが、地上の茎と同じ性質を持つ。スギナ、シバムギなど多くの植物が地下茎を有し、一部の種類では爆発的な繁殖力を持つ。